

キングオブゴールキー
パー（笑）に転生したよ
うだ

ハツタリピエロ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

イナイレ好きな一人の男は世代最強(?)のGKに転生した

※注意! 原作ではなかったオリジナル必殺技やシュート技がでてきます。それでもいいならどうぞ!

目次

キングオブゴールキーパー	1
吹雪姉弟	13
吹雪アツヤorigin	29
お日さま園	41
灰崎凌平	57

キングオブゴールキーパー

ここは……？

目の前に広がるのはどこまでも続く白い雲海。空はなぜか紅かった。

自分に関しての記憶はあった。趣味はサッカーとイナイレのゲームをすること。

確か俺は……新作のイナイレを買った後……

「そうじゃ覚えておったか」

うわっ！

ふと後ろからかけられた声に驚いて振り向くとそこには黄金の後光が輝かしく顔が見えない誰かがいた。

ああ多分あれだ。かみ……

「そうじゃ。ワシがお主等人間でいうところの神じゃ。さて……お主の死因は覚えておるだろうが新作のイナイレを買った後、脳梗塞で死んだのじゃ」

ほーほー……やっぱりか

「お主はあんまり驚かないんじゃない……普通はもつと慌てふためくというのに……」

そりゃ未練がないかと言われればあるし、誰かのせいで死んだというのならともかく

こればかりは文句は言えないからな

「あー……実はな……その死因はワシが原因なんじゃよ」

はあ!? どういうことだ!?

「現世の魂の管理のために殺す人間がお主になってしまおうた。本来はお主は死なないはずだったんじゃよ」

おいおいおい!? それじゃあ俺は殺されたってことか!?

「あー……文句があるのもわかる。じゃがこれもルールなんぞでな。済まないと思つとるし第二の人生を異世界で保証しよう」

マジか!? うーん……生き返らせてくれるならいいかな……?」

「そう言ってくれて助かるよ。転生先や特典も選べるぞ」

じゃあ……イナズマイレブンの世界。あと特典は……前世のポジションだったゴールキーパーになりたいな。せつかくだから円堂やロココのようにシユートも決められるようになりたいな。なので化身を使えるようになるのと才能の上限を最終話時の円堂レベルにしてくださいな

才能ってのは重要だ。確かにほとんどの能力において誰もが努力しなければ伸びないがそこにある才能でその伸びしろは大分違ってくるし上限というものも違ってくる。

「ふむ……よかろう。あと世代はお主の好きな円堂世代にしといてやるぞ」

おつと……うっかりしてた……俺どつちかというと円堂たちと絡みたかったしな。
感謝します

「なになに、元はと言えばこちらの事情で死なせてしまったんじゃからな。じゃあ転生するぞ」

神様が手を翳すと俺の身体は光に包まれて目の前が真っ白になった。

……

フットボールフロンティア

それは全国の中学サッカーの頂点を決める大会。サッカーをやるものなら誰もが日本一を目指す大会であり、大会はいつも熱狂に包まれる。

だが今会場を支配しているのは驚愕と畏怖だった

『なんとということだぁー!!!!帝国学園と世守子中の試合は信じられない試合となつてしまつたぁー!!!』

会場に横たわり傷だらけで倒れているのはフットボールフロンティア40年無敗の帝国学園のメンバー。それを見下ろすのは無傷の世守子中だったがその顔には絶望が滲み出していた。

世守子中のフィールドはまるで嵐が巻き起こったかのようにポロポロとなっておりメンバーも全身汗まみれで立っているのがやっとだった。

『帝国学園対世守子中!!!後半残り僅か!!!帝国学園が12対0という圧倒的な力を見せて
けている!!!しかし!!!驚くべきことは帝国学園は一人を除き、前半戦に世守子中のプレイ
で負傷していること!!!そう!!!これをやったのはたった一人の選手によるものだあああ
ああ!!!』

「バカな………神が………たった一人の男に敵わない………なんて………」

帝国学園のフィールドでは先ほどの通り多くのメンバーが負傷しているがその視線
の先は一人の男を捉えていた。

ゴール前に威風堂々と立っている男。

左から右に下している茶髪にその碧眼は圧倒的強者の威圧を放っていた。

『その選手の名は帝国学園GK!!!源田幸次郎!!!世守子中の強烈な連続攻撃を軽々と防い
だばかりか化身という見たこともない必殺技を出して放たれたシュートを逆に相手
ゴール内に返すという荒業も見せつけたあー!更にそれだけではない!!!GKと思えな
いようなドリブルに走力!!!テクニック!!!そしてシュートの強さ!!!そのどれもが圧倒的
!!!これがキングオブゴールキーパー、いや最早そんな言葉では収まらない彼の實力はキ
ングオブプレイヤーなのかあああ!!!』

世代最強GK源田、彼の實力は広く知れ渡っていたがそれはあくまでGKとしての才
能。それがどうだ?世守子のアフロデイよりも遙かに恐ろしいシュート力ではないか。

更に会場の人間は知らなかったがアフロディたちは影山の指令で神のアクアと呼ばれる体力増強剤によるドーピング紛いのものまでしていた。

だからこそ無敗の帝国学園メンバーを圧倒できたのだ。それがどうだ？

下だと思っていたたった一人の男によつて蹂躪された。

『おーつと……勝負の行方ですが……大会委員の判断により帝国が選手負傷のため自動的に世守子中が不戦勝なるようです!!』

帝国ゴール前に立っていた源田は思った

(ま、影山がサッカー協会を動かしたな)

世守子中のメンバーは二回戦進出を果たしたが彼らに喜びは生まれず虚しさが残るだけであった。

……

どうも。源田に憑依した転生者だ。

こいつに憑依転生したとき初めは落胆した。だって一番強いドリルスマッシャーでも世界編で通用しなくなった爆熱ストームを止められなかったんだぜ？無限の壁？あれはカウントに入らない。

落ち込んだ俺だったがよく考えてみれば円堂レベルの才能をもらったことを忘れていた。俺は源田であつて原作のキングオブゴールキーパー(笑)の源田ではない。

父の命令で仕方なく下についていた影山の指導の裏でこっそりと秘密の特訓を重ねていた

そして現在、帝国学園対世子中の試合だったがボコられるのは嫌だったので全力で止めようとしたらあまりのシュートの弱さに内心では驚いていた。その後もリフレクトバスターやデイバインアロー、ゴッドノウズなどのシュートを打ってきたが……なんというか拍子抜けだった。

今まで全力を出すまでもなくシュートを止められたのではつきり言うとな自分の実力がわからなかった。

雷門は原作の進行状、決勝に進まない和不味かったので適当に手を抜いていたのだ。

止めるだけではつまらなかったなのでゴール前からドリブルで攻め上がると今度は相手の反応の遅さに驚いた。

試しにノーマルシュートを打ったのだが相手GKのポセイドンは反応すらできなかった。

その後も止める度に前線にでてシュートを打ち続けたのだが世子中についてはいくことすらできなかったのだ。

最後の最後でゴッドノウズを打ってきたアフロデイだったが折角なので化身によるオリジナル必殺技を披露したらシュートが弱すぎて逆に相手ゴールに跳ね返すという

結末になった。

んでようやく気付いた

(あれ?もう世界レベルにまでなっちゃってるんじゃないかね?)
って。

確かに上限は円堂レベルにしてもらったがまさかここまでの成長速度だったとは

源田さん半端ねえー!!!

貴方って早期早熟キャラだったんだね……落胆してすみません……それを円堂レベルの上限にしたらこれほどまでになっちゃってしまうとは……

でも一回戦敗退なんだよなー

帝国メンバーも動けないようだし……

俺は会場の通路を歩いていたらピロリんと鳴った携帯電話を手にとってメールを見ていたら

「おい源田!!」

「ん?どうした鬼道」

あの鬼道有斗が後ろからやってきた。鬼道は原作通り大事を取っていたので大怪我を負うことはなかった。

「おまえ………実力を隠していたのか!!?」

鬼道のゴーグル越しの目はウソは許さないと感じた感じだった

「……でもここで自分の實力を知りませんでしたとは言えないし」

「……ああ。いわゆる能ある鷹は爪を隠すってところかな？それがどうかしたか？」

「だったら……なぜ雷門の試合で全力を出さなかったんだ！あれほどのシュートを止められるお前なら……」

「悪いな鬼道、俺は雷門の進化を見てみたかったんだよ。だから手を抜いた」

「進化だと……？」

「ああ、そうだ。別に俺たちはあの試合勝たなくても本選に進出できただろう？だったら雷門に勝ちを譲って更に強くなった雷門を見てみたいと思っただよ」

「それは……！そうだが……！あの時の雷門は全力で来た！ならば……！」

「だがあの時の雷門では勝てなかったのも事実だ。それにお前らが言えることか？」

「どういうことだ……！」

「忘れてるかもしれないだろうが初めての雷門との練習試合、あの試合でお前らが本気を出していたか？」

「それは……！！」

「それに俺はあの時の試合が胸くそ悪かった……！！影山の指令でサッカーではないサッカーをしていたお前らにな！！」

「…………!!」

これは俺の本心だ。遠くから見ているがあれは本当に気分が悪かった。物語の進行状、見逃していたがそれでもイライラしていたのは事実だ。

「影山から離れたとはいえ今まで俺たちがやってきたことはサッカーではない。俺はもうウンザリだ。とはいえ父の都合上俺は帝国にいなければいかなかったが……もう必要ないみたいだな」

「どういふことだ源田!!」

「ついさっき父が死んだとの報告があった。だったら俺を縛るものはなにもない。だから俺は……帝国をやめる」

「なんだと!!」

「はつきり言わせてもらえば俺はあの男が嫌いだった……!!俺を生むためだけに母を利用して捨てたあの男が!!俺がああ男からもらった愛などなにもない!!あんな奴が実の父だと思うと吐き気がする!!そして帝国が!!サッカーを利用して多くの人間を泣かせてきた帝国が嫌いだった!!お前はそう思わないのか!!?鬼道!!」

「……………確かにそうかもしれないな」

「お前がなんと言おうと俺は帝国を止める。だがお前には感謝はしてるよ。今までありがとうな」

俺が帰ろうとした時

「待ってくれ!!」

「お前は……アフロデイ……」

世守子中の紅一点にしてキャプテンのアフロデイ。

俺は初めはアフロデイが女だということに驚きを隠せなかったが神様曰く原作に似たパラレルワールドということなので気にしないことにした。

「……何の用だ?」

「……君たちの仲間を傷つけてしまったことを……済まないと思ってる」

「……だったらもうするなよな」

「ああ……それと聞きたいことがあるんだ」

「なんだ?」

「君は……どこであれほどまでの力を身に着けたんだい? 神のアクアも使わずに……」

「神のアクア? なんなんだそれは?」

本当は色々知っているが聞いておく

「そうだね……どっちみち僕は自首するつもりだし……教えてあげる」

それは原作とまるつきり同じ内容だった。

「影山……!!」

「源田くん……僕は……苦しいんだ……試合には勝ったのに……虚しさが残るんだ……」

「はつきり言わせてもらおうと愚かとしかしいようがないな」

「……」

「勝ちにこだわる気持ちはわからなくはない。この世には必ず勝者と敗者が存在するからな。勝者になろうとするのは間違つてはいない。だがそのような勝ち方では生き残れたとしても得られるのは虚しさだけだ」

「そうだね……なんで今になって気づいたのかな……」

アフロディの頬に涙が伝う

利用されていたアフロディに非がないわけではないがなんとかしてあげたいな

「そう落ち込むな。確かにお前は選手として間違つたことをした。だけど生き残ろうとする気持ちは必要だ。そんな方法で生き残らなくてもいい方法がある」

「え……?」

「簡単だ。強くなればいいんだよ」

「でも……」

「最後に打つたシュート。あれにはお前の本気が籠つていたぜ。俺から言わせればまだまだだがこれからお前は強くなれる」

「本当に……僕も……強くなれるのかな？」

「ああ、誰も最初から強いわけじゃないんだ。確かに才能による差はあるが努力しないものは強くなれはしない」

「………そうだね。僕も……一からやり直してみるよ。ありがとう。源田くん」

そういつて微笑むアフロディはとても凛々しく本当の女神のようだった

「じゃあな。今度は本当に強くなつたおまえを待つてるぜ」

「………ああ!!」

そして数日後、俺は帝国学園を止めた

吹雪姉弟

ースペイン

名門チームバルセロナオーブのスタジアム

その控え室のモニターに日本の全国大会フットボールフロンティアの映像が映っていた。

モニターの前では大柄な丸い輪郭と茶髪のソフトモヒカンが特徴的なマツチヨが腕を組んで映像を見ていた。

「なんだよ？クラリオ、何見てんだ？」

部屋に入ってきたのはピンクの天然パーマの少年ベルガモと尖ったオレンジ髪の毛のルーサーだった。

「いやなに、ジャパンの全国大会を見ていてな。面白い選手を見つけた」

「は？あんな国に面白い奴なんているのかよ？」

「クラリオも冗談が過ぎるぜ」

ハハハと笑う二人

「小さな島国で一番になったからって世界についていけるわけがねえ」

「いや……彼は優勝していない」

「は!?ますます意味不明だぜクラリオ。そんなやつはどこに興味を持ったというんだよ」

ベルガモの言葉にルーサーも笑って頷く

それを見たクラリオはある映像を再生させる

「これは？」

「日本の全国大会、フットボールフロンティアの一回戦の試合映像だ」

映し出されたのは世守子中が帝国学園を圧倒するシーンだったが

「この程度で圧倒されているのか?どうやらジャパンのレベルは相当低いらしいな」

そして世守子中が放ったシュートが帝国ゴールを襲うが

『なんとということだあー!!!キーパー源田!!世守子中の強力な攻撃を軽々と防いで見せたあー!!』

「あんなのアロンソなら簡単に防げるぜ。なあクラリオ、ここにいる誰に興味を持ったんだ?」

「……これから見ていけばわかる」

次々とボールが帝国ゴール目掛けて撃ち込まれるが源田は軽々と防ぎ続け、ボールを地面に置いた次の瞬間

「なっ?!?」

G Kの源田が一瞬で加速して相手の陣内に移動するとそのまま相手に反応させる隙も出させずにゴール前に辿り着くと同時に彼が放ったボールをゴールネットに突き刺さっていた

「おいおい……マジか……」

「あの加速にドリブル……それにシュート力、G Kとは思えねえ……」

その後も源田は一人で攻め続けていたが世守子中についてはいくことすらできなかつた

ベルガモとルーサーも驚きを隠せなかつた。

そして10点を超えて再び世守子中のゴール前に源田が辿り着く。

世守子中G KであるポセイDONは気を引き締めるが源田が雄たけびを上げるとゴールに世守子中のシュートとは比較できないほどのエネルギーが集まった次の瞬間に源田が飛び上がる

『レオ・キャノン!』

源田が足を降り抜いた瞬間に獅子の雄叫びが会場内に轟き、ボールは常人では捉えられないスピードでゴールネットに突き刺さるとそのままゴールを吹き飛ばした

「おいおい……なんだよあのシュート……クラリオのダイヤモンドレイ以上じゃねえか

……」

「なるほど……確かにこいつは世界レベルだ……」

「……それだけではない。これでも彼は全力を出し切ってないようだ」

「……なんでだ？」

「最後の映像を見れば分かる」

映像は後半戦終盤となりアフロデイがゴッドノウズを放った

源田は全く動じずに

「折角だから使ってやるか。ハアあああああ!!」

彼の背後から必殺技とはまた違うエネルギーが具現化して現れた

「これは……!!」

「来いッ!! 幻獣王レグルス!!」

黄金の毛並みに赤がかかった金色の眼、鋭い牙に黄金の手甲を身に着けた獣の王が姿を現した

「キングハウリング!!」

シュートの勢いは一瞬で消えて王者の咆哮はそのままボールを相手ゴールに押し込んだ。

「……はっ。こりやすげえわ。クラリオが興味を持つのもわかる気がするぜ」

「ああ、ジャパンにこれほどまでの選手がいるとはな。俺も興味を持つちまった。ところでクラリオ、なぜこれほどの奴が優勝できていないんだ？こいつならジャパンの大会を一人でも勝ち抜けるほどだぜ？」

ルーサーが疑問を持っていると

『おーつと……勝負の行方ですが……大会委員の判断により帝国が選手負傷のため自動的に世子中が不戦勝なるようです!!』

「マジか……？」

「ジャパンの委員は相当アホらしいな」

ルーサーとベルガモは呆れた感想を漏らす

「源田か……一度会ってみたくなっただぜ」

「……ああ、私もそう思った。だから行くことにした」

「行くって、まさかクラリオ……！」

「ああ、極東の島国、ジャパンに行ってみようと思う」

……

一時間は戻って帝国が敗れてから二週間。

俺が夕飯のための買い物をしていると

「ねえ！あれって源田くんじゃない!？」

「え!? ウソでしょ?」

「あの最強GKの!!」

「なぜだかスゴイ視線を感じるのだが……GKなのにハットトリックを決めまくったからかな?」

と俺の前に小学生ぐらいの少年少女がいつの間にかいた

「……何か用か?」

「あつ、あのつ! 源田さんですよね! 一緒にサッカーしてくれませんか!!」

たどたどしくだが元気よく言ってきた黒髪の子

その眼は純粹に俺とサッカーをしたいのが伝わってきた

俺はフツと笑って

「……いいいぜ。サッカーやろうぜ!」

俺がそう答えると子供たちはさらに目を輝かせて走っていった

・
・
・

??? side

僕たちは明日のフットボールフロンティアの一回戦の調整のために近くの河川敷に向かっていた。

皆も後で来るので先に場所を取っておこうと思ったのだ。

「おい!! あつちに源田さんがいるらしいぞ!!」

「えっ!? 本当!?!」

「マジかよ!! あのキングオブプレイヤーの!!?」

「行つてみようぜ!!」

後ろから地元の子供たちが声とともに前に前を走つていった。

へえ……あの源田くんか……

「キングオブプレイヤー……か。姉貴」

「わかつてるよ。僕たちも行こう」

……

―その頃

俺たちが河川敷でPKの位置に着くとギャラリーが集まってきた。

―源田くんって愛想がいいのね……

―その上カッコいいなんて……

―源田くくん!! こつち向いて〜!!

なぜに俺に黄色い声援が飛び交うのだろう……悪い気はしないけどさ

「行きますよーそりゃー!」

黒髪の子……レイヤが勢いよく端に目掛けて蹴ったボールを俺はジャンプして取る

「いいシュートだったぜ！もう一回やるか!？」

「はいっ！そうだ！源田さん！化身！化身出してもらえませんか！俺もすごいの見せますから！」

「いいぜ！全力で来い！」

「行きますよ！ソニックシヨット！」

レイヤが風を纏ったシュートを打ってきた。ほう……既にこのレベルの技を出せるのか……！

「俺も全力だ！幻獣王レグルス！」

金色の獅子を君臨させると

「キングハウリング!!」

王者の雄叫びでシュートの勢いを殺す

そのボールを俺がキャッチした。

「あー!!やつぱり源田さんはすげーや!!」

「ふっ、お前のシュートも中々よかったぜ」

俺がボールを返そうとしたらピンク髪のツインテールの女の子、鈴が

「ねえねえ！源田さんってすごいシュート持ってるんでしょ!?!ちよつと打ってくれませんか!?!」

「シュートか？いいぜ！獅子の咆哮、しつかり目に焼き付けておけよ！」

持っていたボールを空中に放り投げて雄叫びをあげてエネルギーを増幅させる。

そして左回りに一回転回って右足を思いっきり振り抜く

『レオ・キャノン！』

放たれたシュートは勢いよくゴールネットに刺さってゴールをその勢いのまま吹き

飛ばし

「すっげえ……獅子の雄叫びだあ……」

子供たちが無邪気な目で俺を見てくるので正直悪い気がしない

ーおい……なんだよあのシュート……

ー格が違うすぎる……

ーもしあんなシュートが来たら……

おっと……倒れたゴール元に戻しとかないと

ゴールを起きあがらせてコートに戻ろうとしたらいつのまにか先ほどより多い人数の小学生たちに囲まれていた。

『源田さん!!サインください!!』

小学生たちの目はキラキラとしていたが

「あー……俺、サインなんて書いたことないから下手くそになるかもしれないがそれで

もいいのか?」

『はい!!』

差し出されたボールに自分なりのサインを書いていく。はつきり言ってヘタクソもいいとこだったけどそれでも彼らは喜んでくれた。

とサインを書いていたら鈴が蹴ったボールが土手の方まで飛んでしまった

鈴が慌ててボールを取りに行ったが銀髪の俺と同じぐらいの歳の奴がボールを拾うと

「ハイ。気を付けるんだよ」

「ありがとうございます!」

横にいた似た顔の橙色の少年については知らなかったが俺はこいつを知っている。

ー吹雪士郎

イナズマイレブンの無印2から登場したDFでありながらストライカーでもある攻守に優れた一流のプレイヤー

原作ではともかくこの世界ではフットボールフロンティアにも出ていた。開会式で見たことある。

その吹雪士郎が横にいたもう一人と共に俺に近づいてくる

「よう……お前があ之源田か?」

「そうだが……お前は？まず名乗ってくれ」

「そうだよ。ごめんねこんな弟で」

ん？弟……？まさか……

「初めまして。僕は白恋中の吹雪士郎。そしてこつちが弟の吹雪アツヤ」

アツヤああああ!!?

原作じゃ死んだことになってる君がなんでいるのおおお!!?

もしかしてこれも原作とズレている部分なのか!?

ま、まあ今考えても仕方ないか……

「知ってるかもしれないが俺は源田幸次郎。元帝国のGKだ」

「元帝国……？源田くん、帝国学園を抜けたの……？」

「ああ、少し事情があつてな。それでなんの用だ？」

士郎の次にアツヤが

「……おまえ、キングオブプレイヤーって言われてるらしいじゃねえか。俺たちと勝負しろ!!俺たちがおまえより上だつて証明してやる!!」

いきなりの挑戦をふっかけきたアツヤ

確かエースストライカーがアツヤだったんだよな？

面白え……!

「……いいぜ。全力で来い」

「はっ!!すぐにその余裕顔ぶつ潰してやる!」

アツヤが俺から離れると

「ごめんね源田くん。アイツ負けず嫌いだからさ。自分より強そうな奴見ると勝負ふっかけちゃうんだ」

「別に気にしてねえぜ。それにアイツが言っていた俺たちだが……」

「そうだね。実は僕も君に挑戦したいんだけど……いいかな?」

「勿論構わねえ。で、勝負の内容だが……」

「そうだね……僕たちがシュート打つ。シュートチャンスは三回。それを全て止められたら君の勝利。一本でも入れられたら僕たちの勝利。それでいいかな?」

「ああ、構わねえ」

「アツヤもいいよね?」

「ああ」

そして俺はゴール前に立ってアツヤは

「行くぜええええ!!」

アツヤは大きく足を振りかぶってボールを蹴った。

なるほど。確かに日本トップクラスではあるな。だが所詮日本レベル。ボールの回

転速度からも考えがわかる。

ボールは途中で斜めに軌道を変えてゴールの端を狙う。
だが！

俺は一瞬でボールの前に回り込むと

「なっ、なんだとっ!?!」

特別なことは何もない。ただ蹴り返しただけだ。

「……まずは一本」

足元にボールを蹴り返されたアツヤは

「………だったらこれでどうだ!!」

ボールに回転を加えて冷気を溜める。これは……あれだな。

「吹き荒れる……!!エターナル……ブリザード!!」

アツヤの十八番。エターナルブリザードだ。

凄まじいシュートが襲ってきたが

「ふんっ!」

「なにつ!?!」

パンチングで威力を相殺して上に飛んだボールをキャッチしてボールをアツヤの足元に転がす。

「エターナルブリザードも効かねえなんて……だつたら……!」

アツヤが士郎にアイコンタクトを送ると

「っ！そうだね！アレやるよ！」

士郎が上に蹴り上げたボールをアツヤが冷気のエネルギーを込めた上からの蹴りで空中に固定する。

そして二人は回転しながらボールに向かっていき氷のエネルギーを纏った足で同時にボールを蹴る。

あれ？こんな技あつたっけ？

「ホワイトダブルインパクト！」

二人版エターナルブリザードとも言うのだろうか。そこはエターナルブリザードDDでいいだろ。なんだそのネーミングセンス

それは置いといて二重の螺旋の吹雪がゴールを襲ってくるが、俺は片手を前に突き出してボールを受け止める。

むっ……確かに凄まじいエネルギーだが……

「なにっ!!？」

回転は徐々に収束していきボールは俺の手に収まった。

ーおいおい……なんだよあのシュート……

―あれが……ブリザードの吹雪姉弟……

―だがあんなシユートを片手で受け止めた源田……

―アイツからどうやって点を取ればいいんだ……？

ギャラリーがなにやらブツブツ言っていると土郎とアツヤがこつちに来て

「負けたよ。すごいね。君」

「お前らのシユートも中々良かった。またやってみたいな」

「ふふふっ！ 僕もだよ」

土郎と握手を交わしていると

「あー!! 今回は負けを認めてやる!! だが次やる時はぜってえ負けねえからな!」

アツヤがビシッと指差して言い放つ

とレイヤが土郎の元に来て

「あつ、あの! 雪原のプリンセスの吹雪土郎さんですよね! サインください!」

「ふふっ、いいよ」

土郎は妖艶さを感じさせる笑みで笑った。腐女子が騒ぐはずだ……うん? プリンセ

ス?

「おいアツヤ」

「あ? なんだ?」

「士郎って……もしかしてお前の姉か？」

「あっ!? 当たり前だろ! もしかして妹だとも思ったのか!？」

……………絶句

二人目のTSプレイヤーを見つけた瞬間でした。

吹雪アツヤorigin

俺は今、フットボールフロンティアのスタジアムで白恋中の試合を見ていた。

白恋中の動きは事前に見たビデオの動きとは全く異なるものとなっていた。

今までの白恋中の動きは士郎とアツヤの二人を中心としたプレイ、良く言えば二人の凄さが際立つ、悪く言えば二人のワンマンプレイだった。

だが今では他の皆も二人ほどではないが、相手をマークして動きを止めたりと相手を翻弄している。

アツヤも時には味方にパスをしたりしてチームを引っ張っていた。
なぜここまでプレイスタイルが変わったのか。

ーそれはあの勝負の後

「士郎くん！アツヤー！来たよー！」

白恋中のメンバーが河川敷に入ってくると

「えっ!?アツタまさか……!!」

「目深先輩、知り合いやっぺ？」

「何言ってるんだ!!あの帝国学園の絶対守護者源田幸次郎だぞ!!」

『て、帝国学園んっ?!?』

藁帽子の荒谷紺子や金髪の髪にファーのついた白いロシア帽の真都路珠香を始めとする白恋のメンバーが驚いていた。

「ふ、二人とも何してたの……?」

荒谷が心配そうに聞いてくる

「ああ、ちよつと勝負してただけだね。全然勝てなかつたよ」

「し、士郎とアツヤの二人が!!?」

「そ、想像できないっぺ……!!」

真都路と氷上が信じられないような顔をしていた。

その後白恋メンバーが練習を始めたので俺は近くのベンチでボーツとしていた時「何やってんだアツヤ!」

うん?

怒号が河川敷に響いて俺の意識は元に戻る。

「なんであそこでパスを出さないんだ!あれじゃ試合ではボールを奪われるぞ!!」

「あー……なんだそんなことか。安心しな。俺からボールを取れるやつなんていねえよ」

「そうじゃないだろ!サッカーはお前一人でやってるんじゃないやねえんだ!」

「……確かに俺一人じゃない。俺と姉貴の二人だ。つてゆーかお前から下手くそなくせに何言ってるんだ？」

「アツヤ!!」

「そもそもお前から人数合わせのためだから」

「デメエ……!!」

これは……マズいな

俺がグラウンドに入ると

「あ？なんだよ源田。止めにでもきたのか？お前には関係ねえだろ」

「……確かにな。俺には関係ない」

「なら「だがお前のやり方が下手くそもいいところだから教えにやってきたんだよ」なんだと!!」

俺はハア……とため息を吐いて

「……お前のやり方は二流には通用してもすぐに限界が来るぞ」

「デメエ……!!」

アツヤが俺の胸倉を掴んだ時に

「……と、お前がチームメイトに言っていたようなことを言っちゃったが……どうだ？」

「はっ！俺とアイツらは違うんだよ！」

「……………どうだか」

「テメエ!!」

「なら俺と勝負しようぜ?俺を抜いてみる。勿論俺はGKじゃないから手を使わないし、必殺技も使わねえ。なんなら何人ががりでもいいぜ?」

「上等だ!!テメエをぶっ潰しやる!!」

アツヤがボールを持ってセンターラインに立つと俺はサイドラインの前につく。

「行くぜエエ!!!」

アツヤが勢いよく突っ込んでくるが

「……………フツ!!」

俺が一瞬で加速してボールを奪う。

「なっ、なんだとっ!?!」

俺はアツヤを一瞥すると

「……………この程度か?」

「……………チツ!もう一回だ!もう一回勝負しろ!」

そして再びポジションに着くと

「今度こそ!!」

アツヤが向かってくるがファイントのフェの字もないただの突っ込みなので

「……なっ!? またっ……!!」

「……どうした? あっさりと奪れたぞ? さっきの言葉はなんだつたんだ?」

その後も馬鹿正直に突っ込んでくるアツヤからボールを奪い続ける。

「クソがアアア!!」

ボールを奪おうとアツヤが突進してくるが俺はボールを後ろに回して足の裏でボールを前に戻す、いわゆるヒールで躲す。

「……なんでだ!? なんでボールを奪えねえんだ!!」

「……少し考えればわかるはずなんだがなあ……」

「ああ!!」

「……仲間と協力すること。どんなに強くても一人じゃ限界がある」

「そんなはずはねえ!! 俺はいつだって姉貴とだけで勝ってきた……!! なのに……!!」

「……確かに他のメンバーはお前らには及ばないかもしれない……だがサッカーってのは皆でやるもんじゃないのか? お前は何のためにサッカーをやってるんだ? お前のやるサッカーってのは相手を、仲間を見下すためのつまらないものなのか?」

「そんなわけ、ねえ……」

「お前のチームメイトだって勝つためにサッカーをしているのかもしれない。でもサッカーってのは皆でボールを繋いで楽しむものじゃないのか? お前のサッカーのオ

リジンは？」

「俺の……オリジン……」

アツヤは思い出す。

自分のサツカーの原点を

ーアツヤー！パス、パス！

俺を誘ってくれた姉貴……

そうだ……あの時は純粹にサツカーボールを蹴っていたんだ……

ーアツヤ凄いなー！

ー頑張つて！アツヤ！

母さん……父さんの応援が好きだった……

ーアツヤは俺たちのなかで一番のエースストライカーだな！

ー俺たちも負けてられねえな！

そうだ……俺は皆の笑う姿が……皆と一緒にボールを追いかける……そんなサツカーが好きだった……いつしかそれが当たり前と思って……皆の気持ちを考えていなかった……

いつからか……姉貴以外の全てを見下して、自分を信じてくれる白恋の仲間を見てすらいなかった……

俺は……こんなつまらないサッカーをしたかったのか……？いや違う！自分を信じ
てくれる仲間を……裏切るようなサッカーはしたくない！

だから……!!

「皆……!!俺じゃアイツ……源田には勝てねえ……!!だから……恥を承知で頼む……!!
俺に力を貸してくれ……!!」

アツヤが頭を下げて皆に頼み込むと

「……しゃーないっぺな！アツヤ！貸し一つっぺよ！」

荒谷が協力すると宣言すると

「あー……わかってくれたのならいいんだ……じゃあやるか！」

目深もアツヤのことを許して白恋中メンバーとアツヤが和解した瞬間であった。

「んじゃあ……!!仕切り直しだ!!行くぜエ源田アア!!」

再び突進を仕掛けてきたアツヤ。

だが先程のようにはいかなないと気づいた。なぜなら

(コースが塞がれてるな……)

そうドリブルでボールをキープして逃げるには少々難しい……いや、

フェイントなどを駆使すれば抜けなくはないが……

「はっ、どうした、逃げねえのかあ！」

アツヤがボールを奪おうと足を突き出してくるが後ろにボールを回してアツヤの足を出す方向とは逆の位置にボールを動かし続ける。

だがアツヤは先程のように焦っていなかった。

と後ろから氷上と喜多見のスライディングが襲ってきたが両足でボールを挟んでバックジャンプして躲す。

「チッ！」

「……で、どうだ？ チームプレイってのは」

「……悪くねえな」

「さてと……どうする？ まだ続けるか？」

「はっ！ 当然だ！」

その後も、何度もフェイントや連携プレーを仕掛けてきたが俺からボールは奪えなかった。

ただどアツヤの顔はどこか清々しいものだった。

アツヤは今までの自分の行いを皆に謝って、皆もアツヤを許した。

ーそして現在

白恋中が9ー0で圧倒的勝利を収めた後俺は土郎に呼び出された。

うむむ……こうやって二人きりで対面するのは初めてだし……土郎が女の子だとわ

かつて前世を含めて彼女いない歴30年の俺にはどうも緊張が抜けない……

それに士郎は初めて会った時はなにかで押さえつけていたかというぐらい胸が大きい……

「……何の用だ？」

「ありがとうね……僕以外を信じていなかったアツヤに……大切なことを思い出させてくれて……」

そう言って微笑む士郎は天使のようで俺は思わず赤面しそうになるが

「……あれは偶然だ」

「ウソばかり……アツヤのことを放って置けなかったんでしょ？だから姉としても感謝の言葉を伝えたいな♪」

「……まあそういうことにしてやる。あと、一回戦突破おめでとう」

「ありがとう♪」

「じゃあな。待ってるんだろ？チームメイトが」

「そうだね。じゃあね。源田くん」

「ああ」

俺が先に帰った後の廊下では

「源田くん……なんでだろう……優しい君と……ずっと話していたい……そんな気持ち

でいっぱいだよ……」

吹雪士郎は胸に手を当てて早まる心臓の鼓動を感じていた。

……

士郎と別れてから俺は特にやることもなくしばらくブラブラしていた。

「ねえ……あの人が……」

「……うん。あの源田……」

「アイツが日本最強プレイヤー……か」

声の方を見てみると向かいの道路で俺と同じぐらいの歳の女の子たちがこちらを見ているのに気づく。

だがまああの試合の後、こういった視線は慣れていたので俺は気にせずに前に進む

ー……と思ったのだが遠くからの車の駆動音を聞いて振り向くと

信号を渡ろうとしている彼女たちにトラックが迫っているのが見えた。

「ツ!!!マズイ!!!チーターアクセル!!!」

俺は咄嗟にドリブル技を使って一瞬で彼女たちと車の間に行くと

「来いッ！ 幻獣王レグルス!!」

化身を登場させると突っ込んできたトラックを受け止めさせる。

トラックは止まり中から運転手と思われし人物が出てきたが無視することにした。あれだけの騒ぎを起こせばすぐに捕まるからな

それよりも

「大丈夫か？ お前ら」

倒れている三人の安否確認をする

あれ？ この三人……どっかで見たような……

「ありがとう……助かったわ」

「……ありがとう」

「ありがとうね」

青いロングヘアーの少女

青髪のショートカットにジト目の少女

特徴のあるオレンジ髪に青色の釣り目の少女の順で俺に礼を言ってきた。

「なに、大事に至らなくて何よりだ。じゃあな」

そして俺は家に帰ってテレビのニュースをつけると影山の神のアクアの件が明らかとなったニュースと先程のトラックが影山の指示だということが自供で明らかとなつ

ていた。

トラック事故を引き起こそうとした狙いは世守子中の次の対戦相手、永世学園のメンバー、先程の女子たちを負傷させることが狙いだったらしい。

それにしてもあの子らどっかで見たよーな気がするんだよね？

お日さま園

帝国を辞めた後の俺はこれからどここの学校に入るかだが、未だに決まっておらず今も河川敷で小学生たちと一緒にサツカーをしている。

「源田兄ちゃん!! シュート行くよー!!」

「来い!!」

「彗星シュート!!」

鈴が打ってきたシュートをアップパーで上へと飛ばす。

「あー!! やつぱり源田兄ちゃんは強いー!!」

「お前のシュートも中々強くなってきたぞ。シュートを強くするには反復あるのみだ」

ま、こういうサッカーも悪くないかな

小学生組と別れた後、俺は家に帰ろうかと思つたが

(偶には外食もいいかな)

俺は近くのシヨッピングモールのフードコートで飯を済ませることにした

んで、昼飯を食べ終わって帰ろうとした時

「えっ!? 玲名、財布忘れてきたの!?!」

隣のハンバーガーショップがなにやら騒がしかったため、近くまでいってみると

「どうしよ……10人分のお金預かってきたのに……」

「私もそんなに持ち合わせないよ?」

どうやら注文はしたが財布を忘れたという状況らしい。

仕方ない。見てみぬふりは出来ねえや

「あのー……つてあつ!?!」

「なに? つてあつ!?!」

俺が声を呼び掛けた相手は昨日影山が起こした事故に巻き込まれそうだった女の子たちだった。

「貴方は昨日の……!?!」

「それは後にして財布忘れたんだろ? ほら」

そう言つて俺は万札を渡す

「つて! 受け取れないよ! こんなに大きな金!」

「つといても財布忘れてきたんだろ? このままここにいると店の人にも迷惑だし、なにより放っておけないんでな。受け取ってくれた方が助かる」

「で、でも……」

オレンジ髪の女の子は受け取りにくくなっていたが

「……ありがとう」

「ちよっ!?! クララ!?!」

ジト目の女の子が万札を受け取った

「……相手のご厚意は素直に受け取った方がいい」

「／／／／!! ホントトゴメン!!」

そう言っつてハンバーガーショップのレジに戻る彼女たち

んで俺がショピングモールから出るときに

「おーい!!」

振り向くと大荷物を持ったさっきの少女たちがこっちに來た。

「さっきはありがとうね」

「お陰で助かったわ」

「……ん。ありがとう」

「礼は素直に受け取っておくよ。それで?」

「あー……さっきのお金返すからさ? 付いてきてくれない?」

「いや、別に返さなくてもいいんだけど……」

「アンタはそれでよくてもこっちがなんか後ろめたいの!! いいからついてきて!!」

「……わかった。そういうや自己紹介がまだだったな。俺は源田幸次郎だ」

「知ってるよ。私は永世学園の蓮池杏！よろしく！杏って呼んで！」

「……同じく永世学園の倉掛クララ。私もクララでいい……」

「八神玲名よ。よろしく」

杏？クララ？玲名……あーっ!!!思い出した!!この子達エイリア学園のマスターランクの子たちだ!!

まだ雷門が優勝してないから各地を襲ってないだけなのか……!!いや、違うよな。普通にフットボールフロンティアに出てたから目立つような真似が出来ないわけじゃないし……

それに吹雪アツヤが生きていたってことから一つの可能性を浮かべていたわけだが……今、確信を持った。この世界はもう一つのルートである

「アレスルートか……」

そう。俺が買おうとしていた新作のゲームを基にした新アニメ。予告だけしか俺は見えていなかったが

まあ、エイリア学園が中学校を破壊し尽くすよりはいいかもしれないけどね？

んでもこの後の展開を知らないんだよなー

「ん？源田どうしたの？」

「いや、なんでもない」

「それじゃ行こつか!!」

歩こうとしたら杏が俺の左隣にきて腕を絡ませてきた。

あ、あの〜?

と気づいた時には右隣に玲名がいて腕を絡ませてきた。

クララが頬つぺを膨らませて不満そうにこちらを見ている。

なんか鋭い視線が飛び交っているような気がするんですけど……気のせい?

……

杏 side

初めて会ったのは交差点の向かいだった。

それまでの彼に対する印象はただ凄いと思っただけで超えたい相手だった。

でもあの時は本当に恐怖した。車で両親が亡くした時を思い出してしまい私は動け

なかった。

絶望した時に彼は自分の危険を顧みずに私たちを助けてくれた。

そんな彼をカッコいいと思っただけで思わずその大きな背中に見惚れてしまった。

そして彼はすぐに私たちを心配してくれ、手を差し伸べてくれた。

それだけで私の震えた心はどれだけ救われたか

また会いたい……と思つていたら思わぬところで再会ができた。

彼が困つていた私たちにまた手を差し伸べてくれた。

強いだけじゃない。迷わず人を助けられるその広い心に私は惚れてしまったようだ。

だから思わず別れたくないと思つて彼を半ば強引についでくるように言つてしまつた。

私の心を射止めたんだから覚悟しときなさいよ！

・
・
・

クララ side

初めはなんとも思つていなかった。

彼のことは同じサッカープレイヤーとして凄いとだけしか。

杏たちと出かけていた時に私たちは事故に巻き込まれそうだったのを助けてくれた時から彼に対する想いが変わつた。

あの時は震えて動けなかった。逃げることにすらままたまらない自分はこのまま死ぬのだと思つた。

でも次に目を開けた時に見た彼の背中が父さんと同じぐらい偉大なものに見えた、彼のことがあの時から気になって仕方がない。

心の中は彼のことではいっばいだった。

会えるはずもないと勝手に思っていたが神さまがチャンスをくれたみたいだった。

あの時は遠慮せずに受けとってしまっただがお陰で私はあの時に握った手の温もりが忘れられなかった。

とつても大きくて優しいあの手の感触が

そしてこの人のことをもっと知りたい……と思うようになって私は自分の気持ちに氣付いた。

―この人が好きなんだと

私の心は彼の虜になってしまったんだと

だから彼がお日さま園に来てくれる……と杏が言った時は嬉しかった。

でも杏も玲名も同じ気持ちを抱いていると直感か教えてくれた。

杏！玲名！いくら親友でもこの人は渡さないからね！！

・・・

玲名 side

千差万別というのは本当なのだろう。

だって昨日会ったばかりのこの人に私は夢中になってしまっている。

きつかけはあの時の交差点だろう。

私はあの時、死を覚悟した。人生というものは呆気なく終わるものなんだとあの時だ

けは神さまを恨んだ。

だけと神さまはそんなに世界に薄情じゃないみたいだった。

あの時私たちは彼に助けられた。

たったそれだけで……いや、だからこそ私は彼を好きになったのだろう。

それから彼のことを調べるために過去のサッカー雑誌をタツヤや晴矢、風介から借りて読み漁ったのは記憶に新しい

彼とまた会いたい……という感情が芽生えるまでにはそう遅くはなかった。

そしてすぐにその機会は訪れて私は喜んだ。

クララが彼の手を取った時は羨望と嫉妬の気持ちが心の中で溢れた。

二人を見てすぐに気がついた。

二人もこの人が好きなんだと

でも私も引くつもりはないから油断しないことね！

・
・
・

連れられた場所はやはりあのお日さま園……のメンバーのために作られたらしい学校、永世学園だった。

「あつー杏たちが帰ってきた!!」

確かあの子はダイヤモンドダストのアイシー……本名は凍地愛だっけ？が杏た

ちが帰ってきたのに声をあげる。

ぞろぞろとお日さまま園のメンバーが集まってくる。ゼルにマキユア、アイキューに……ネツパーもいるよ！神殺しの熱波さんが！

「あれ？こいつ誰……って源田アア!!？」

「え!!?ウソだろ!!?あの帝国の絶対守護者の!!？」

と俺がいたことで更に騒がしくなり

「ありがとうな!!杏たちを助けてくれて!!」

「私も感謝してます!!」

「マキも!!」

昨日の件で礼をお日さま園の皆に囲まれて礼を言われる

ハハハ……悪い気はしないんだがな……

「君が源田くん……だよ。玲名たちを助けてくれてありがとう。俺は基山タツヤ」

あつ！円堂親衛隊の一人、基山ヒロトじゃないか！確かこの世界では吉良ヒロトが生きているから名前を受け継がなかったんだ

「よろしく。知ってるかもしれないが俺は源田幸次郎だ」

「お！おまえが杏たちか気にしていた源田か！俺は南雲晴矢!!気軽に名前前で呼んでくれて構わねえぜ!!」

バーンさんじゃないっすか！チューリップ頭との呼び名がある！

「……なんか失礼なこと考えてなかったか？」

「……ハハハ。まさか」

……勘はいいな

「涼野風介だ。君のことは巷でよく聞いているよ。私のことも名前で構わない」

ガゼル様だ！俺よくノーザンインパクト使ってたんだよなー！

「砂木沼治だ！同じG K 同士仲良くやろうではないか！ちなみに俺はFWもこなせるぞ
！」

デザーム様だ！あの有名なセリフ『3分で決着をつける』って言ってロココにマジ
ツッコミされたあの！

「緑川リュウジだ。一期一回。この出会いを大事にしたいと思ってる」

レーゼだ！あの宇宙人役バリバリにこなしていた！

と俺が心の中で盛り上がっていると

「あ！源田くん！サッカーやろうよ！」

凍地妹が誘ってきたので

「いいぜーやろうー！」

と俺が返したら皆がポジションについていった。

「源田、ちよつと待っててね。財布取ってくるから」

杏を待つ間、俺たちはサッカーをすることになった。

ちなみにチーム分けとポジションはこうだ

チームA

—————砂木沼—————

——凍地妹——凍地兄——紀伊——クララ——

——瀨方——熱波——マキ——玲名——

—————南雲—————涼野—————

チームB

—————基山———緑川———伊豆野———

—————栗尾———三浦———厚石———

——石平———極川———本場———丹波———

—————俺—————

「んじゃ……始め!!」

試合が始まり瀨方がサイドラインを上つていくが栗尾が目の前に立ち塞がる。が、ボールを保持して皇マキが上がってくるのをみてサイドチェンジでボールを渡す。

丹波を筆頭にするDFラインが上がってくるがマキはボールを上を飛ばして自らも

飛び上がるとオーバーヘッドキックの体勢になり

「メテオシャワー!」

そのままボールを蹴ると隕石の雨が降り注ぎDF陣は吹き飛ばされる。

そしてボールはフリーになった瀬方が受け取ると

「へっ……!」

右手を前に突き出すとボールも磁力のようなもので浮かび上がってエネルギーを込め、左手と一緒に突き出す。

これはアレだ。イナイレでも毎回と言っていいほど突っ込まれるあの技

「ガニメデプロトン!」

完全にハンドにしか見えないのだがなぜだかハンドではない。ジャツジスルーと同じぐらいルールギリギリの技だ

俺はそのシュートを突き出した右手で受け止める。

「なっ?!なんだとっ?!」

「……………」

「瀬方の必殺技を……余裕で受け止めやがった……!!」

熱波さんが信じられないような顔をしています驚くのは序の口

「よっ……フツ!!」

俺は空中にトラップしたボールを思いっきり蹴って吹き飛ばす。

そのボールは一気に相手陣内まで到達してゴールに向かって直進する
「なにつ!？」

南雲さんは驚いて振り向くが時すでに遅し。

ボールはゴールネットを揺らした。

「ば、バカな……!!」

「凄い……」

「ゴールエリアから相手ゴールに直接シュートを決めるなんて……」

「へっ!!やるじゃねえか!!」

「先んずれば人を制す……か」

そしてAボールで試合が再開された。

晴矢がドリブルで上がっていく。タツヤのスライディングも風介にパスをして躲す。

そのまま風介と晴矢のパス回しで上がっていくが風介がパスを出そうとしたが石平が晴矢をマークしていた。

と次の瞬間、

極川が仕掛ける

「フローズンスタイル!」

風介は跳んで躲すがその先には既にも大場が待ち構えていて

「イグナイトステイール！」

スライディング技でボールを奪われた風介だったが空中で体勢を立て直して着地してボールを奪いに行くが

「……………おりやああああ!!」

『えええええっ!!?』

ペナルティエリアから飛び出した俺に驚く一同だったが

「こっちだ!!」

ノーマークの俺を見た大場はパス要求に応じてくれて俺にパスが通った、

「ツ!!止めるぞ!!」

凍地兄がすぐさま反応してDF四人がかりでマークにつこうとするが

「甘いぜ…………ラビット・ザ・ロード！」

俺は両足でボールを挟み、地面にボールをめり込ませてその反動で兎のように跳んでマークを回避する。

「ウソだろ!!?」

「決めろっ!!リユウジ!!」

「任せろ!!アストロ…………ブレイク!!」

リュウジがボールに回転を与えて右足を思いっきり振り抜く。

「止める……!! ドリルスマツシャー!!」

砂木沼の右手に巨大なドリルが出現してアストロブレイクを真正面から受け止める。

「又ウウウウウ……!!!! ぜやあつ!!」

拮抗したがアストロブレイクは返されてボールは砂木沼の手元に収まった。

「また威力を上げたな!! リュウジ!!」

「へへッ!! 源田!! パスありがとうな!!」

「礼なんか要らねえよ!」

そして砂木沼のゴールキックを受けた玲名が伊豆野と三浦を躲すと前線に大きくパスを出す。

それを受けたのは

「行くぜ源田!! 紅蓮の炎で焼き尽くしてやる!!」

晴矢が上空へボールを蹴り上げてそのまま飛び上がってオーバーヘッドキックの体勢になる

「アトミックフレア!!」

放たれたシュートは勢いよくゴールを襲ったが

「全力には全力で答えてやる!! 来いっ!! 幻獣王レグルス!! キング…ハウリング!!」

レグルスの雄叫びかアトミックフレアの勢いを完全に殺して、跳ね返す。

「ツ!!砂木沼ア!!」

「止める……!!ドリルスマツシャーW!!」

両手に出現させたドリルでボールを受け止めるが

「又ウウウウ……!!グワアアアアア!!」

チームBに二点目が入った瞬間だった。

そして終了のホイッスルが鳴った。

「イヤー!!やるな源田よ!!まさかここまでの威力とは!!」

「やるじゃねえか!!俺のシユートを止めるに飽き足らず跳ね返すとは面白え!!」

「噂以上の実力だね」

「楽しかったよ。源田くん。ありがとう」

「ああ、俺も楽しかった。それで……」

「?」

「また来ていいかな?」

『勿論!!』

灰崎凌平

今日は土曜なのでまた、お日さま園に行く予定だ。玲名や杏、クララにタツヤたちからまた来てほしいと言われたので休日は何度か行くことにしているのだ。

といつても午前は授業らしいので午後に行くつもりなのだ。にしてホント、どこの学校に編入しようかな……

そんなことを考えていると、またいつもの河川敷の近くまで来ていた。だがこんな時間に来ている者など居ないと思つて、通り過ぎようと思つたが一人だけボールを蹴る者がいたのを見つけた。

動くたびに灰色のロングヘアがなびくが、それ以上に誰も寄せ付けないようなギラついた目が気になった。ガムシャラにボールを追いかける姿は楽しんでというようなものではなく、何かを憎んでプレイをしているように見えた

だがそのプレイスタイルは荒々しいが繊細さを感じた。

ゴール前までドリブルで駆け上がると、空中にボールを蹴り上げて口笛を吹く。

すると地面から現れた六体のペンギンがボールに突き刺さり、オーバーヘッドキックの体勢になる。

「オーバヘッドペンギン!!」

放たれたシュートがゴールを直進していたが……あー、ありや失敗だな
未完成だったのか途中で軌道がブレて、こちらに向かってくる

「おいっ！危ねえ!!」

灰色少年にとつては俺がここにいるのが予想外だったのか、注意を呼び掛けてくる
が、ポケットにいれていた手を取り出してボールを受け止める。

「なっ!!?」

俺は土手から河川敷に降りるとそいつにボールを渡す。

「ほらよ」

「な……す、すまねえ」

「気をつけろよ。サッカーは時に人を傷つける凶器になりうるんだからな」

「あ、ああ……アンタ、サッカープレイヤーなのか?」

「え?俺を知らないの?」

「ああ知らねえ」

……ま、まあ全国に出ただけじゃ知らない人がいるのも無理はないか……帝国つつう
でも一回戦負けしたし

「元帝国学園サッカー部の源田幸次郎だ。お前は?」

「……………灰崎凌兵」

これが後にフィールドの悪魔と呼ばれる灰崎との最初の出会いだった。

……

しばらく時間があつたので灰崎のプレイを見てもいいかと聞いたら『好きにしろ』と言われたのでベンチで彼のプレイを眺めていた。

「オーバーヘッドペンギン！」

灰崎が放つたシュートがブレることなくゴールネットを揺らした。

(それにしても中々だな……………シュートの威力だけなら豪炎寺にもヒケを取らないかもしれない……………)

灰崎はボールを取り、満足した笑みを浮かべると俺の方へ来て

「なあ……………」

「なんだ？」

「……………アンタはキーパーなのか？」

「ん？ああ、まあな」

「だったら俺と勝負してくれ！完成した俺のシュートが奴らに通用するかどうか……………！
知りてえんだ！」

「……………」

なんかよくわかんねえが……

「サッカーなら受けて立つぜ！」

俺はゴール前に立ち灰崎と一対一となる

灰崎がボールを空中にキラーパスを出すと次の瞬間に飛び上がり口笛を吹く。すると地面から6匹のペンギンがクチバシをボールに当てて回転してボールに力を与える。

それをオーバーヘッドキックの体勢になった灰崎が右足を振り抜く

「オーバーヘッドペンギン！」

灰崎の放ったシュートがゴール前にいる俺に飛んでくるが……

「……………」

前に突き出した右手にシュートがぶつかると重心を少し落とした俺が動くことはなく勢いが弱まっていきボールは俺の手に収まった

「なっ?!なんだとっ?!」

……中々いいシュートだな。ペンギン技はハンド系に有効とされる技だから鍛え上げれば今の円堂のゴッドハンドなら破れるかもな

俺が内心で高い評価をつけていたのだが灰崎は納得しない表情で

「クソツツ！もう一回だ！もう一回勝負しろ！」

灰崎にボールを返すとさつきよりも荒々しくボールを空中に飛ばして自身も飛び上

がる。

「オーバーヘッドペンギン！」

……うん。さっきのほうが強かったな

下から足を蹴り上げて、シュートの勢いを殺して胸でトラップする。

その後も何度もシュートを打ってくるが、イライラしてるせいかが集中できていない。

「なんでだ!!なんで通じねえんだ!!俺は……こんなところでうだうだやってるわけにはいかねえんだよ……!!」

灰崎が見せたその眼は最初に見た時と同じ濁った憎悪の眼だった。

俺はベンチまで行きさっき買ったドリンクを灰崎に渡す

「……………なんだよ」

「一回休め。今は落ち着かないとなにもできないぞ」

「……………ああ」

灰崎も隣に腰掛けてスポーツドリンクを飲む。少しの間、沈黙が流れるが俺がそれを破る

「なあ、灰崎。こんなこと聞くのは野暮かもしれないが……おまえ、なにを憎んでる？」

「なんでっ……………!」

「お前に似た眼をみたことがあるからな……」

あの影山が一度だけ俺に見せたサッカーを憎む眼。灰崎はサッカー自信を憎んでるようではないが憎悪の眼であることは明らかだ。

「……アンタはそれを聞いてどうしようってんだよ……」

「……憎しみでサッカーをやるってのに口を挟むつもりじゃない。お前のことを知っているわけじゃないんだ。いや知ってたとしてもお前の気持ちを俺は知らないんだ。簡単に否定できるはずもない」

「……………」

「でもな。憎しみ過ぎると周りが見えなくなるぞ。その憎しみで自分や周りを壊すこともあるんだ」

「アンタはソナナやつを知っているのか……？」

「……………ああ」

「……………」

「お前が何かを憎んでサッカーをするのにも俺は何も言うつもりはない……が一つだけ言っておくぞ」

「な、なんだよ……」

「サッカーは一人でやるもんじゃない。十一人でやるもんなんだ。例え自分が皆とは違

う目的でプレイするとしても……お前は一人じゃないんだ。戦うときはチームメイトもいるんだ。自分と共に戦うやつらは信じてやってもいいんじゃないか？」

「でも俺は……」

「今は憎しみしか感じないかもしれない。でも楽しいぞ？ サッカーは」

「……………」

「……………いつか、お前と楽しんでみたいな」

「……………アンタバカじゃねえのか」

「自覚してるよ。俺はどうしようもないぐらいの……サッカーバカなんだって」

「……………そうか」

「……………」

「……………俺には茜っていう幼馴染がいたんだ」

灰崎が話した内容を簡単に説明すると幼馴染の茜という子がアレスの天秤という教育プログラムの弊害を受けて物言わなくなってしまったことが灰崎にとっては許せないらしい。だからアレスの天秤が作り上げた王帝月ノ宮中をサッカーで倒すことでアレスの天秤に何の意味のないものと証明することが今の目標だとらしい

「俺は……茜をあんな風にしたアレスの天秤が許せねえ……」

「……………そうか。俺はお前の苦しみはわからない……でも、おまえが本当にサッカー

を楽しめる日が……来るといいな」

「源田……さん」

そしてお日さま園に行く時間になったので俺が河川敷から出ようとした時

「源田さん」

「なんだ？」

「……またここで……一緒にサッカーしてくれないか？」

「……ああ！」